

小オンリー
型テイマーの
辺境開拓スローライフ2

小さいからって何もできないわけじゃない！

Ryuto Watari

著 渡琉兎

イラスト しば



◀ ガズン ▶

冒険者パーティ
「明星」のリーダー。
真面目で頼れる青年剣士。

◀ オルフェン ▶

冒険者パーティ
「明星」のメンバー。
危険を察知する斥候役。

◀ ミシャ ▶

冒険者パーティ
「明星」のメンバー。
明るく元気な魔導士。

◀ ギーベ ▶

新たに仲間になった
子供の熊。
実はA級魔獣のギガントベア。

◀ ルナ ▶

リドルが二番目に会った
子猫の魔獣。
花を愛するきれい好きな女の子。
炎魔法が超得意。

◀ リドル ▶

本作の主人公。
小型魔獣しかテイムできない
スキル「小型オンリーテイム」を
授かったせいで辺境領に追放される。
優しい性格で、
従魔たちとは超仲良し。

◀ ガルオン ▶

戦闘好きな
カンガルーの魔獣。
赤いハチマキが
チャームポイント。

◀ レオ ▶

リドルが最初に出会った
子犬の魔獣。
添い寝が大好きな甘えん坊だが、
凶悪魔獣も案に倒しちゃう！

Characters

登場人物紹介

◆◆◆第一章：ルッツの再訪◆◆◆

日本でサラリーマンとして深夜残業に取り組んでいた男性——六井吾郎は、突如視界が暗くなり、気づいた時には、貴族家の長男、リドル・ブリードとして、異世界に転生していた。

転生した世界には『スキル』と呼ばれる特殊な力が存在しており、リドルは『小型オンリーティム』という、小型魔獣専門のティムスキルを授かった。

しかし、その異世界には大型魔獣は強く有用で、小型魔獣は弱く無能という思想がはびこっており、リドルは未開地の開拓をしろという名目で、ブリード家から追放されてしまう。

リドルは小型従魔のレオとルナと共に未開地を目指し、流れの商人であるルッツの助けを借りながら旅立つことになる。

その道中、レオとルナが小型ながら、大型魔獣を上回る強さを誇っていることが判明した。

頼もしい従魔と共に未開地に到着したリドルは、魔獣に襲われている少女ティナを助け、彼女の案内で未開地唯一の村へ案内してもらう。

最初こそ領主として認められなかったリドルだったが、村の生活改善に力を注いでいくことで、村長でティナの親であるナイルやルミナ、大工職人のコーワンを中心とした村の人たちにも徐々に

認められていく。

小型従魔も増えていき、グラスモグラのグース、黄金^{オウゴン}コロガシのゴンコ、小人^{こびと}ゴーレムのミニゴレ、ゴレキチにゴレオにゴレミも村の改善に大活躍。

村の外れで暮らしていた魔導具師のアニータとも親交を深め、村は賑^{にぎ}わいを見せていく。

そんな中、大型魔獣のギガントベアが村へと迫り、追いついてられる形で小型や中型の魔獣までもが村に襲^{しや}来^きしてきてしまう事件が発生。

リドルは村のみんなと協力し合^あって村を守り抜くと、襲撃してきたギガントベアの行動は、赤ちゃんを守るためのものだったと知る。

弱肉強食の世界を目^まの当^あたりにしたリドルは、ギガントベアの赤ちゃんをタイムし、ギーベと名付けて親の代わりを守ることを決意した。

そして平和が訪れると、今日も村の生活を良くするためのリドルの一日が始まろうとしていた。



魔獣の襲来^{しりぞ}を退^{しりぞ}け、俺——リドルが村で目を覚ましてから三日が経^へった。

村は平和そのものであり、このまま平和が続けばいいと思いながら、今日も物見台^{ものみだい}から外の景色を眺^{なが}めていた。

「あれ？ 何か、近づいてきてる？」

すると、街道^{かいどう}が続いている方向から馬車が近づいてきていることに気がついた。

こんな辺境^{へんきやう}の未開地に誰が、という思いが頭に浮かび、俺は警戒^{けいかい}するため足元にいた従魔たちへ声を掛ける。

「様子を見にいこう。レオとルナも来てくれるか？」

俺の足元^{あしもと}にいたのは、白と青の毛並みを揺^ゆらしながら飛び跳ねていた、アイスフェンリルのレオ、そして赤と橙^{だいだい}のサラサラな毛並みが美しい、フレイムパンサーのルナだ。

「ガウ！」

「ミー！」

レオとルナが力強く返事をしてくれたので、俺はしゃがんでから二匹の頭を優しく撫^なでたあと、急いで物見台を降りていく。

「おや？ リドル君じゃないか、どうしたんだい？」

降りた先にはたまたま通り掛かったのか、村長のナイルさんがいて、声を掛けてくれた。

「街道の方から馬車が来ています。警戒のため、俺とレオとルナで見えます」

「そうなのかい？ それなら私も行こう。領主はリドル君だが、この村の村長は私だからね」

「ありがとうございます」

今の俺の中身は大人だが、見た目は一二歳の少年だ。

相手によっては子供だと侮^{あやむ}られることもあるため、ナイルさんが一緒に来てくれると非常にありがたい。

俺たちはそのまま村の入り口まで移動すると、しばらくして馬車の姿がはつきりと確認できるようになってきた。

ただし、御者^{ぎよしゃ}席に座る人物を見た俺たちは、警戒が杞憂^{きゆう}だったと分かり、ナイルさんと共に胸を撫で下ろした。

御者席にいたのは、俺が村に来る時にとってもお世話になった人物、流れの商人であるルッツさんだった。

馬車が入り口の近くで止まったので、ナイルさんと共に駆け寄る。

「ルッツさん！ お久しぶりです！」

「ああ、リドル様！ それにナイル様も、お久しぶりでございます！」

俺が声を掛けると、ルッツさんは笑顔を返してくれた。

「ガウガウ！」

「ミーミー！」

「レオにルナも。お久しぶりです」

どうやらレオとルナもルッツさんを覚えていたようで、嬉しそうに鳴いて出迎えていた。

小型オンリータイムを持っている俺は、従魔の言葉が分かるのだ。

「今日はどうしたんですか？ またスキルがこつちに来るように？」

ルッツさんが授かったスキルの『放浪^{ほうろう}の導^{みちび}き』は、スキルが示した場所へ向かうことで、良いことが起きやすくなる、というものになっている。

絶対に良いことが起きるわけではないが、それでもルッツさんはスキルを信賴しており、過去にこの村へやってきた時もスキルに従^{したが}っていたとのこと。

「ふふ、その通りです。この地に大きな商機^{しやうき}があると、私のスキルが教えてくれたのですよ！」

さすがは商人だ。まあ、ルッツさんは既に大きく稼^{かせ}いでいることだろうけど。

なんせルッツさんは、村を出ていく際にゴンコが作った肥料^{ひりょう}、これを使って育てられた最高に美味な作物を大量に持ち帰っている。

作物はきつと大人気となり、儲けられたに違いない。

「……まあ、今の村の状況を見てしまえば、私の判断に間違いはなかったと言えるでしょうね」

そう口にしたルッツさんの視線は、ギガントベアの襲撃に備えて造った外壁に向けられている。

「ああ、これはルッツさんが村を離れたあとに造った外壁ですね」

「簡単に言ってくれますね、リドル様は。ただまあ、魔の森に面した村ですし、これくらいの外壁は必要ですよ」

「あはは、とても大変でしたけどね。大型魔獣が迫っていると分かって、大急ぎで造ったんですよ。丸一日掛かりました」

「……え？ ま、丸一日、ですか？」

「はい、丸一日です」

「……あれ？ 俺、なんか変なことでも言ったかな？」

「……それは本当のですか、ナイル様？」

あ、この人、嘘だっと思ってるな？

するとナイルさんが呆れたように答える。

「嘘かと思うでしょうが、本当の話ですよ、ルッツさん」

「……ふ、普通、これだけの外壁であれば、数日は掛かるものなのですよ？」

ルッツさんが困ったように言うので、俺は答える。

「そうなんですか？ まあ、従魔たちの力も借りましたし、だから早く造れたのかもしれないですね。そうだ！ 新しい従魔も増えたんですよ！」

「……あ、なるほど。それならば、できるのかもしれませんが、か？」

納得しているのか、していないのか。そんな反応のルッツさんだが、村の入り口で立ち話もなんである。

「久しぶりですし、俺の屋敷で話をしませんか？」

「ああ、それはありがたいですね。ですがその前に、私に同行している者を紹介しておきましよう」

ルッツさんはそう口にすると、荷台にいた二人の男性と、馬車を守るようにして馬に跨っていた男女二人の、計四人を呼び寄せた。

「紹介いたします。まずは一緒に同乗していた長髪のこちらの方が、護衛として雇った冒険者パーティ『明星』のメンバーのオルフェンさん。そして、馬に跨っていたお二人が、同じくメンバーのミシャさんと、そのリーダーであるガズンさんです」

三人の冒険者は、それぞれが軽く頭を下げた。

「明星の皆さん。ルッツさんを護衛してくれて、ありがとうございます。皆さんも一緒に、私の屋敷に来てくれると嬉しいですよ」

俺がそう口にすると、何故か冒険者の三人は顔を見合わせ、驚きの表情をしていた。

「……えっと、どうしたんですか？」

思わず問い返すと、ガズンと呼ばれたガタイの良い茶髪の男性が口を開く。

「いえ。権力者である領主様が、冒険者を屋敷に招くなんて……それに丁寧な言葉遣いまでされるなんて、始めてのことですよ……」

「そうなんですか？ ですが、ここにいらすとそんなこと気にしては生きていけませんからね。お気になさらず、是非屋敷にお越しくださいね？」

俺がそう口にするも、ガズンさんたちはまだ躊躇っているようだ。

「おもてなしを受けてもいいと思いますよ、ガズンさん」

そこへ助け舟を出したのは、ルッツさんだった。

「こちらまでの道中でも申し上げましたが、リドルさんも大変な経験をされてきた方です。なので、下の者のことを考えてくれる方なのですよ」

「下の者って、明らかに俺よりも年上の人にその言い方は失礼じゃないですか？」

「ほら、こんなことを言う方ですよ？」

こんなことって、どういうことだろうか。

そう思っていると、今度はナイルさんが口を開く。

「もしもリドル君だけでは不安だというのなら、私も同行いたしましょう。一応、私がこの村の村長ですから」

不安って、ナイルさん。

でも、ナイルさんがいてくれるだけでみんなが安心するなら、非常にありがたい提案でもある。

「……分かりました。そこまで言ってくれるなら、おじゃまさせていただきます」

「ガズンがそう言うなら、俺も構わないぜ」

「私もー！」

ガズンさんの決定に、オルフェンさん、そして赤髪ショートヘアのミシャさんが手を上げた。

「ありがとうございます。それと、ルッツさん。もうお一人の方は？」

馬車の荷台からは、オルフェンさんともう一人、黒髪短髪の男性が降りてきている。

パッと見だと一五歳前後かと思われる青年だ。

「そうでしたね。彼は若手商人のアグリコ」

「お初にお目に掛かります。アグリコと申します、リドル様」

アグリコさんは丁寧（ていねい）に自己紹介をしながら、深く頭を下げてくれた。

「アグリコとは、こちらに向かう途中の村で知り合いましたね。こちらで仕入れた作物を食べて感動したようで、どうしても同行したいということで、連れてきた次第です」

「そうだったんですね。気に入っていただけただけで、何よりです」

俺がそう伝えると、アグリコさんは興奮した様子で語り始める。

「私は勉強もかねて都市から都市へ移動しておりまして、各地の料理を食べ歩いていると自負（じぶ）しているのですが、ルッツ様からいただいた作物の味には驚嘆（きょうたん）いたしました！ こちらの作物があれば、この世界の食文化が一気に変わると確信しております！ なのでどうか私にも、一口乗らせていただければと！」

お、おおう。なんだろう、ものすごい熱意を持った人なんだな。

「落ち着きなさい、アグリコ」

早口に気持ちをぶつけてきたアグリコさんにルッツさんが声を掛けると、彼は申し訳なさそうにしながら頭を下げた。

「はっ！ ……し、失礼いたしました」

「いえいえ。俺としては、村の作物をここまで評価してくれているのは嬉しい限りですよ」

そんなアグリコさんに俺は笑顔で答えると、村の入り口から中へと促す^{うなが}。

「それじゃあ行きましょう。アグリコさん絶賛^{ぜったん}の作物で、おもてなしもさせていただきます」

こうして俺は、思わぬ再会に喜びながら、自分の屋敷へルツツさんたちを案内することにした。

村の中を進んでいると、ルツツさんのことを覚えていた人たちだけでなく、彼を初めて見る人たちも積極的に声を掛けてくれた。

俺が初めて訪れた時は、みんな遠巻き^{とわま}に見ているだけだったので、生活環境の改善がここでもより良い影響を与えているのだと実感できた。

そんなことを考えていると、すぐに俺の屋敷に到着した。

「……いやはや。これはまた、すごいお屋敷ですね」

外壁を見た時と同じようなリアクションをしているルツツさんに、俺は苦笑しながら中へ入るよう促す。

「皆さん、どうぞ」

「それでは、遠慮なく」

ルツツさんはすぐに入ってくれたのだが、明星の面々にアグリコさんは、ここでも躊躇いを見せている。

「どうぞ、お気になさらず」

念押しでもう一度伝えると、四人は顔を見合わせたあと、一つ頷いてから中に入ってくれた。

……ここまで緊張するなんて、都会の権力者はよっぽど厳しいのだろうか。

まあ、俺の実家はそんな権力者の家なんだけどな。

「ゴゴ？」

「どわあっ!？」

すると、屋敷にはミニゴレが来ており、初対面のルツツさんは驚きの声を上げた。

「あれ？ ミニゴレ、こっちに来ていたのか？ すみません、ルツツさん。この子はミニゴレ、俺の従魔で小人ゴーレムです」

「……あ、ああ、なるほど。これは失礼いたしました」

「グゴ？ ゴゴー!」

頭を下げながらルツツさんが謝罪すると、ミニゴレは首を傾げたあと、軽く右手を上げた。

「気にしないみたいですよ」

「そうですか、それはよかったです」

気にしていないことを知り、ルツツさんはホッと胸を撫で下ろした。

「他にも新しい従魔がいちつしやるのでしょうか？」

「あ、はい。ルツツさんが知らない子だと、同じ小人ゴーレムのゴレキチ、ゴレオ、ゴレミ。それ

にギガントベアの赤ちゃんでギーベですかね」

「ギ、ギガントベアだって!？」

「うわあっ!？」

ギガントベアの名前が出ると、明星の三人が驚きの声を上げた。

「……ど、どうしたんですか？」

「あ! いや、その、失礼いたしました!」

ガズンさんたちの態度を見ていると、砕けた言葉遣いをしてくれるまで時間が掛かりそうだな。「そこまでかしこまらないでください。領主とはいえ、俺はまだ子供なんだし。それで、どうしました？」

そんなことを言いながら、俺は彼らが話し出すのを待ってみた。

「……ギガントベアというのは、Sランクに近い、Aランク上位の魔獣だと言われているのです」

「赤ちゃんとはいえ、そんな魔獣をテイムできるなんて、すげえなって……いや、すげえですね? うーん、違うなあ」

「すごいですね! じゃないかな？」

「お、お前たちなあ……」

この三人、どうやらガズンさんがまとめ役で、オルフェンさんがチャライ系、ミシャさんが元気印って感じかな?

三人の性格を分析しながら、俺は答える。

「話し方は本当に気にしないでください。しかし、そうだったんですね。そりやどうりで、ギガントベアは強いわけだ」

「強い? 赤ちゃんのギガントベアと戦ったのですか？」

どうやら魔獣の情報に関しては気になるのか、ガズンさんから声を掛けてくれた。

これは打ち解けるチャンスかもしれないな。

「いえ、親のギガントベアと戦ったんですよ。レオとルナがいなかったら、この村も危なかったんですよね。……って、ん? どうしたんですか？」

話の途中から、ガズンさんたちの表情が驚愕したものに変わっていた。

……俺、何か変なことでも言っただろうか?

「……まさか、リドル様? 大人のギガントベアと、戦ったのですか？」

ルツさんも驚きのまま聞いてきたので、俺はレオとルナを撫でながら答える。

「はい。でも、戦ったのは俺じゃなくて、レオとルナですよ?」

するとガズンさんたちが恐る恐るといった感じで口を開く。

「……さ、さっきも言いましたけど、ギガントベアはSランクに近い、Aランク上位の魔獣です」

「つまり、化け物ってことっすよ!」

「そんな魔獣を倒しちゃうだなんて、すごいです!」

あつと言う間にフランクな話し方をしてくれている。どうやらオルフェンさんとミシャさんとは、すぐに打ち解けられそうだ。

「……………申し訳ございません、領主様」

そんな二人の態度を見て顔を覆^{おほ}っているガズンさんは、しつかり者^{もの}でいいんだろうけど。「ガズンさんも、砕けた感じでいいですからね？」

「……………善処^{ぜんしよ}します」

「あ、あの、リドル様！ 突然で申し訳ないのですが、よろしいでしょうか！」

おっと、ここでアグリコさんが話に割^わって入ってきた。

「なんでしょうか？」

「そ、その、大人のギガントベアの素材は、残っているのでしょうか！」

「ああ！ 確かにその通りですね、アグリコ！ いかがでしょうか、リドル様！」

ここは商人らしく、目をぎらつかせながらアグリコさんとルツツさんが聞いてきた。

「いいえ、ありません」

しかし俺は、正直に答えた。

「もしや、持ち帰れなかったとかでしょうか？」

「違います。話せば長くなるので、この場では止めておきます」

ギーベの親であるギガントベアは子供を守るため、傷つきながらも俺たちに戦いを挑んできた。

レオとルナのおかげで勝つことはできたが、結局はギーベの親の命を奪ってしまったのだ。俺はギーベを守ると決めた。いや、親のギガントベアと約束したのだ。

弱肉強食の世界において、死んでしまった魔獣の素材を使うことも問題はないだろう。

だけど、それは俺の心が許さなかった。近くに子供であるギーベがいたからだ。

「……………そうですか。かしこまりました」

冷静になったルツツさんは、柔和^{にやわ}な笑みを浮かべながらそう答えた。

何かを察してくれたのだろうか。ありがたい限りだ。

「それでしたら、リドル様。私が村を発^たつ時にお願^{ねが}いしていたことは決めてくれましたか？」

「え？ 何かありましたっけ？」

ルツツさんから急な話題^{てんか}転換^{てんか}があり、俺は首を傾^かげながら返す。

「……………村の名前を決めておいて欲しいという話なのですが……………ナイル様は何か聞いていますか？」

「リドル君からそのような話は聞いていませんね」

「……………ああああああ！ 言っていましたね、そういえば！」

完全に忘れてた！

俺がそう叫ぶと、ルツツさんはやれやれといった感じで肩を竦^{すく}めた。

「ずっと村の名前を仰らないので、そうではないかと思っておりました」

「いや、だって！ そこまで重要だとは思っていなかったんですよ！」

それに、名前以上に大事な事案が次々と起きていたのだ、忘れてしまったのは許してほしい。

「本当に大変だったんですよ？　ギガントベアが襲ってきたことを考えたら、分かりますよね！」

「ええ、もちろん。ですが今は、その騒動も終わったんですよね？」

「あー、えっと……はい」

「でしたら、今ここで決めてしましましょう。ナイル様もいらっしやることですし」

これはもう、断ることはできない状況だ。

というカルツツさん、この状況を利用して名前を決めさせようとしているんじゃないか？

そんなことを思いながら、俺はナイルさんに問い掛ける。

「ナイルさん。そもそもこの村にはどうして名前がなかったんですか？」

「詳しい理由は分からないが、私が村長になる前から、特に村の名前については聞かされていなかったよ。でもこれまではみんな生活が大変で、村の名前を考える余裕なんてなかったからね」

「そ、そうなんですね」

ナイルさんの言葉を聞くと、みんなの視線が俺に集まっていることに気づく。

「いや、本当に俺が決めていいんですか？　ネーミングセンス、皆無ですよ？」

「リドル君はこの領主なわけだし、村の名前を決めてもらえると助かるよ」

ナイルさんがそう答えると、レオ、ルナ、ミニゴレが口を挟んでくる。

「ガウ！」

「ミー！」

「グゴ！」

「いや、その、みんなの名前はきちんと考えたぞ？　気に入っているだろう？」

俺がそう口にしたところで、三匹は顔を見合わせ、大きく頷いた。

……よ、よかった。いや、本当にきちんと考えて付けた名前だから、嘘ではないぞ、うん。

しかし、村の名前かあ。従魔の名前と違って、種族に寄せた名前が付けられないからなあ」

何か方向性の軸があったら、考えやすいんだけどなあ。

俺がそう呟くと、ナイルさんが穏やかな笑みを浮かべる。

「それだったら、リドル君の名前を取るのどうかな？」

「お、俺の名前ですか？」

いや、それはさすがに恥ずかしいんだけど。

「この村はリドル君のおかげで立派な村に生まれ変わったんだから、そうするべきじゃないか？」
俺のおかげというわけではないけど、そう思ってくれていたというのは純粋に嬉しいな。

……まあ、村の名前に使うかどうかは別だけど。

「いや、俺の名前を使うだなんて……」

「さっきも言ったが、リドル君がいなければ、この村の発展はなかった。ならば、初めて付ける村の名前にリドル君の名前を使うのは、当然だろう？」

「当然じゃないですよ！」

俺が少しムキになつて答えると、今度はルッツさんが割り込んでくる。

「いいえ、リドル様。それは当然ですよ！」

何をどう思つて当然、だと考えたんですか！

そんなことを思っている、ナイルさんが穏やかな様子で告げる。

「何もリドル君の名前をそのまま使うわけではない。例えば、名前を崩すのはどうだろうか」

「……名前を崩す、ですか。あの、ナイルさん？ もしかして、希望の名前が既にあったりしませんか？」

話し方からして、ナイルさんは具体的な名前を思いついているような気がしてならないな。

「……バレたかい？」

「やつぱり！ 教えてくださいよ、その名前！」

ナイルさんの考えている名前が良ければ、そのまま採用してしまいたい！

「私が考えていた名前は——リディアル」

「……リディアル、ですか？」

「ああ。どうだろうか、リドル君？」

「……リディアル……リディアル……リディアル……」

「……とても、良いと思います！」

俺がそう答えると、ルッツさんも大きく頷く。

「ええ！ 私もそう思いますよ、ナイル様！」

「そ、そうですね？ それならば嬉しいのですが」

俺とルッツさんが褒めていると、ナイルさんは照れたように笑った。

「それじゃあ、村の名前はリディアルで決定しましょう！」

「ありがとうございます、ナイル様。これで今後、作物を売りに出す際に、未開地の近くにある村、リディアルの名産だと伝えることができますよ」

笑顔でそう口にしたルッツさんに、俺は思わず声を掛ける。

「今まではどのように伝えていたんですか？」

「未開地の近くにある村で採れた作物だと、伝えておりました」

「なるほど。確かに、産地を言うだけで、なんというか、響きが変わりますね」

「そうですね、ナイル様！ 相手の記憶に残るように商品を売るというのも、商人にとっては大事なことですからね」

満足気にそう口にしたルッツさん。

彼は彼なりにこの村のことを……いいや、リディアルのことを広めようとしてくれているんだな。

「それとですね、ナイル様」

「どうしたんですか、ルッツさん？」

「他にもリドル様が作り出した、新たな名産品などはありませんでしょうか？ あればそれも是非売っていただきたいのですが！」

「それには私も興味があります！」

ルッツさんのお願いを聞いたアグリコさんも乗っかり、ナイルさんは苦笑する。

「そうですね。名産品になるかどうかは分かりませんが、魔導具師まどうぐしの方がいらっしやいます」

「ご紹介願えませんでしょうか!!」

「……わ、分かりました。リドル君、すまないが明星の皆さんをよろしく頼むよ」

ナイルさんは商人二人の勢いに負けて、そのまま自分の屋敷に移動してしまう。

そうして、残されたのは……。

「……あの、俺たちは、どうしたらいいんだろうか？」

「……ついていった方が良くね？ 一応、護衛なんだし？」

「……でも、村長さんが私たちのことは、領主様に頼むって言っていたけど？」

残されたガズンさん、オルフェンさん、ミシャさんが困惑顔で話し合いを始め、最終的にはこちらに視線を向けてきた。

「……もしよかったら、腹ごしらえでもしますか？ 村で採れる作物、とても美味しいですよ？」

「え！ いいの！ やったー!!」

俺の提案に即反応してくれたのは、ミシャさんだ。

「こら、ミシャ！」

ガズンさんは怒るが、彼女は気にした様子を見せない。

「だってー！ ルッツさんが食べさせてくれた作物、とっても美味しかったんだもん！」

「そういやあ、この村の作物だってルッツさん言ってたな！」

オルフェンさんも期待した様子だったので、リーダーのガズンさんに確認を取ってみる。

「どうですか、ガズンさん？ 皆さんに食べてもらえると、俺も嬉しいのですが」

オルフェンさんとミシャさんは、まっすぐガズンさんを見つめている。

「……だあああ。分かったから、その目を止める！ お願いできるだろうか……領主様」

「リドルでいいですよ」

「……リドル、様？」

「様もいりません」

どうにも態度が崩れてくれないガズンさんを見かねてか、ミシャさんが口を挟んでくる。

「もー！ ガズンは堅かたいんだよ！ リドル君でいいんじゃない？」

「いや、さすがに君付けは」

「これはもういつそのこと、リドルでいいんじゃない？」

オルフェンさんがそう言うが、ガズンさんは首を大きく横に振る。

「呼び捨てはもっとダメだろう！」

「いいですよ、呼び捨てでも」

「そ、そんなことが!?」

さてさて、ガズンさんの呼び方はどうなるのかな。
ガズンさんには悪いんだけど、少しだけ楽しみだ。

「……よ、よろしく頼む、リドル殿^{どの}」

「うーん……まあ、それでいいですよ」

多少は碎けたし、ひとまずこれでいいだろう。

「はいはいはい！ 私のリドル君にしまーす！」

「俺はリドルだな！ よろしくな、リドル！」

「よろしくお願いします、皆さん。すぐに準備してくるので、少しだけ待っていてくださいね」
こうして俺は、少しだけ冒険者の三人と心を通わせることができたのだった。

それからすぐにご飯の準備を始めたのだが、ここでもガズンさんは驚いたように口を開く。

「リ、リドル殿が料理をするのか？」

「はい。これでも結構得意だったりするんですよ？」

俺の答えを聞き、オルフェンさんとミシャさんも感心しているようだった。

「へえー。領主自らが料理だなんて、珍しいもんだな」

「本当だよな。偉い人^{えらい}って、料理人を雇って作らせているイメージしかなかったよ」

それは俺も同意です。

それに、俺が前世の記憶もなく、ブリード家に可愛^{めづ}かられていたなら、料理なんてできていなかったと思うしね。

「俺は家では立場が微妙^{びみょう}でしたし、いずれ自立しなきゃいけないと思っていたので、勉強^{べんきやう}していたんですよ」

そんな話をしながらも、俺は料理を作り始めていく。

とはいえ、村で採れた作物は生で食べても美味しいものしかない。

変に味付けをするよりも、簡単に調理して出す方がいいに決まっている。

というわけで俺は、カブの皮を剥いて薄くスライスしたものと、千切りにしたものとで食感を楽しんでもらおうと、お皿に盛りつけていく。

みずみずしいトマトは生で食べてもらおうと、くし切りにするだけだ。

ニンジン^{にんじん}は軽く炒^{いた}めて火を通し、レタスの葉の上に乗せ、包^{つつ}んでから盛りつけた。

今では他にも多くの作物を育てており、それらも簡単な調理でお皿に盛りつけ、ガズンさんたちの前に出していった。

それを見て、ガズンさんが口を開く。

「豪華だな。これほどの食事を出してもらって、本当にいいのか？」

「ゴンコが作る土のおかげで、作物の育ちがいいんですよ。余るくらいにたくさんあるので、構いませんよ」

「どれも生だつたり、ただ火を通しただけのはずなのに……めっちゃ良い匂いだな！」

「ねえねえ、もう食べていいかな？ 食べていいよね！」

料理の香りに食欲をそられたのか、オルフェンさんとミシャさんが我慢できなさそうにうずうずしている。

「はい、もちろんですよ」

それが嬉しく、俺は笑顔で答えた。

「やったぜ！」

「早く食べようよ、ガズン！」

「そうだな。それではありがたくいただきます」

それからガズンさんたちは料理を口に運んだ。

最初はゆっくりと咀嚼を繰り返していたのだが、途中からその勢いが増し、三人とも無我夢中で食べ進めていく。

その様子を俺が満足気に眺めていると、用意した料理はあつという間に三人の胃袋の中に消えていってしまった。

「ああー！ マジで美味かった！」

「ごちそうさまでーす！」

「こんなにも美味しい料理は初めてかもしれないな。ありがとう、リドル殿」

「いえいえ。皆さんの食べっぷりを見ていたら、こつちが嬉しくなっちゃいました」

俺だけではなく、三人もとて満足してくれたようだ。

しかし、三人が食事を終えたものの、ナイルさんたちはいまだ戻ってこない。

「しかし、リドル殿と関われば関わるほど、ブリード家の次期当主とは違うのだと思わされるな」
ここでガズンさんから、何故か俺の実家のブリード家の話題が飛び出した。

ちなみに屋敷に来る途中で聞いたのだが、三人も、俺が追放されたことは知っているらしい。

まあ、追放された直後から話題になっていたからな。

「ブリード家の次期当主って、アヴィドのことですか？ あいつ、何かしたんですか？」

俺が弟について問い掛けると、ガズンさんは洪面になりながら答えてくれる。

「どうにも、ブリード領にある各地の冒険者ギルドで、問題を起こしているようなのだ」

「ええっ!? いったいどうしてそんなことに？」

「ブリード家ってよ、スキルを授かったら本来、一人で従魔をタイムしに行くんだろ？」

「そのアヴィドって子は、冒険者に依頼を出して一緒にタイムしに行こうとしているみたいなの」
オルフェンさんとミシャさんの説明を聞き、俺は父上が何やら話をしてたことを思い出した。

「あー……確か、最低でも中型魔獣を一人でタイムできるだけの力がなければ、ブリード家当主に

はなれないとか、なんとか。そんな話がありましたね」

俺は昔から家での待遇が悪かったたので詳しい話は知らないのだが、そんな話を聞いたことがある。「だがアヴィドは先ほども言った通り、冒険者ギルドに依頼を出していて、しかもそのギルドでもトラブルを起こしているのだ」

改めてガズンさんが説明してくれ、俺は納得したように頷く。

「たぶんですけど、中型ではなく、大型魔獣を一人でティムしろとか言われた可能性がありますね。『上級ティム』を授かったアヴィドは、俺の反動もあって父上の期待が大きいんだと思います」

大型魔獣ともなれば、冒険者が集団で狩るような凶暴な魔獣が多い。

それを一人で、さらにただ狩るのではなくティムするとなれば、より難度は上がるはずだ。

だからこそ冒険者ギルドで依頼を出し、冒険者に協力してもらおうと考えているのだろう。

父上が市井のことに興味がないのはアヴィドも知っているだろうし、父上にはバレないと思っ
ているのかもしれない。

父上も父上なら、アヴィドもアヴィドだ。

言いつけを守らないなら守らないなりに、やりようがあるだろう。

「なんだか、お騒がせして申し訳ございません」

正直なところ、俺はブリード家を追放された身だ。気にする必要はどこにもないと思う。

だけど、父上やアヴィドが誰かに迷惑を掛けている、それがお世話になっている人に関わる人で

あれば、謝罪はしておくべきだと思ってしまった。

「どうしてリドル殿が謝るんだ？」

「面倒ごとを起こしているのは、そのアヴィドって奴だろう？」

「リドル君は気にしちゃダメだよ」

しかしガズンさんたちはそう言ってくれ、俺は少しだけ心が軽くなる。

「……ありがとうございます」

お礼を口にした俺は、このままここにいってもガズンさんたちが暇を持て余すと考え、一つの提案を口にする。

「せっかくリディアルまで足を運んでくださったわけですし、ちよつと魔獣狩りにでも行ってみませんか？」

魔の森には、強い魔獣が比較的多く生息している。

冒険者といえど、魔獣の素材の売却も稼ぎの一つだろうし、上手く素材を持ち帰ることができれば、ガズンさんたちの懐の足しになるのではないかと考えたのだ。

「俺たちは構わないが、いいのか？」

「リドルはこの領主だろう？」

「忙しいんじゃないの？」

ガズンさんたちから心配の声が上がったが、俺は苦笑しながら答えた。

「俺の仕事には、レオやルナと一緒に森に入つての魔獣狩りもありますからね。村のことは基本、ナイルさんにも任せてありますし。魔の森の魔獣は強いですから、皆さんの生活の足しになるかなと思つたんです。どうですか？」

俺がそう続けると、ガズンさん、オルフェンさん、ミシャさんは一度顔を見合わせたあと、大きく頷いてくれた。

「案内を頼めるだろうか」

「レオとルナの実力も見てみたいしな！」

「よろしくね、リドル君！」

「それじゃあ、念のためナイルさんたちにも行き先を伝えておきましょう」

そう口にした俺たちは、屋敷を出てすぐ隣にあるナイルさんの屋敷へ向かう。

到着してすぐに扉をノックして声を掛けると、中から足音が近づいてきた。

「はーい！ あつ、リドルだ！ どうしたの？」

出迎えてくれたのは、ナイルさんの一人娘であるティナだった。

「こんにちは、ティナ。ちよつと森まで行こうと思つて、ナイルさんに報告しに来たんだ」

「そうなんだ！ お父さん、呼んでこようか？」

「うん。伝えてくれるだけでいいよ。俺たちはそのまま森に向か——」

「リドルくうううん!!」

俺が「森に向かう」と言おうとしたところで、屋敷の奥から女性の声が響いてきた。

「はあ。どうしたんですか、アニータさん？」

奥の部屋から姿を現したのは、自称天才魔導具師のアニータさんだ。

魔導具師とは、魔導具の開発をする人のことで、彼女の魔導具には、魔獣が襲来してきた時にも助けられた。

彼女は本当に天才魔導具師だが、言動が色々と残念なので、あえて自称と言わせてもらっている。

アニータさんは俺をじつと見つめて口を開く。

「森に行くって聞こえたわよ！」

「えつと、まあ、はい。行きますけど？」

「魔導具に使えるような素材の確保、よろしくね！」

そうウインクをしながら口にしたアニータさんは、踵きびすを返して屋敷の奥へと姿を消してしまった。ガズンさんたちはその様子を見て、呆気に取られていた。

「……なんだったのだ、今のは？」

「……魔導具って言つてたし、魔導具師なんじゃねえか？」

「……領主相手に、すごい態度だったわね」

確かに、ミシャさんが言つたように領主に対しての態度ではないよな。

でもまあ、あれがりディアルでの普通なわけで、俺も特段文句を言うつもりはない。

……素材を確保するかどうかは別としてね。

「とりあえず、行きましようか」

気を取り直した俺は、振り返りながらガズンさんに声を掛けた。

「いいのか？」

「大丈夫です。レオとルナもよろしくな」

「ガウ！」

「ミー！」

レオとルナからも元気な返事をもらえたところで、そのまま屋敷を出ようとする。

「気をつけてね、リドル！」

「ああ！ 行ってくるよ、ティナ！」

最後まで見送ってくれたティナに手を振りながら、俺たちは魔の森へと向かった。

魔の森の魔獣は強いものの、村の周囲に関しては正直、そこまで強い魔獣はいないと思っている。レオとルナと一緒に定期的に魔獣狩りをしているのだが、二匹が警戒するような魔獣には、村の周辺では出会ったことがないからだ。

ガズンさんたちがどれだけ強いのかは分からないが、様子を見ながらなら、多少森の奥に入っても大丈夫だろう。

そんなことを考えながら歩いていると、先頭を進んでいたレオとルナが立ち止まる。

「……どうやら魔獣を発見したようです」

レオとルナの様子からガズンさんたちに伝えようと、彼らは驚きの表情をしていた。

「……どうしたんですか？」

「いや、マジで？ 俺の索敵範囲さくてきはんいにはまだ引っ掛かってないんだけど？」

特に驚いた表情をしていたオルフェンさんが声を掛けてきた。

「そうだと思います。だよな、レオ？」

「ガウアッ！」

俺の問い掛けにレオが元気よく返事をしたので、ガズンさんたちはすぐに臨戦態勢りんせんたいせいを整える。

三人を見てみると、ガズンさんは腰に提さげていた大剣を、オルフェンさんは短剣を、そしてミシャさんは杖つえを構え始めた。

この世界の冒険者がどのような戦い方をするのかは分からないけど、武器から察するに、ガズンさんが前衛ぜんゑ、オルフェンさんが中衛、ミシャさんが後衛ごゑって感じかな。

「……おいおい、マジで来たぞ！ こっちに向かってすごい勢いで近づいてきてる！ あと五秒もしたら見えるぞ！」

おお、すごいな、オルフェンさん。

レオとルナは魔獣だから、同じ魔獣の気配を感じ取れていても不思議じゃないけど、人間のオル

フエンさんも何かしらの手段で魔獣との距離を正確に把握はあくしているようだ。

「……………見えたぞ！ ミシャ！」

「はいはい！ アイスショット！」

ガズンさんが叫ぶと同時に、ミシャさんが杖を振り上げる。

すると、杖の先端にはめられている青色の宝玉が光を放ち、その上空に氷の塊かたまりが現れた。

「おおっ！ これはもしかして、魔法！」

俺が感動の声を上げていると、ミシャさんが杖を振り下ろした。

「いつけー！」

同時に氷の塊が、見えてきた魔獣めがけて飛んでいく。

近づいてきていたのは鹿しかに似た中型魔獣、ワイルドディアだ。

額ひたいから生えた巨大な二本の角で敵を薙なぎ払い投げ飛ばす魔獣で、強靱きうじんな脚力きやくりきも備えている。

氷の塊は、そんなワイルドディアの眉間みけんに命中し、止まりはしなかったが、突進の勢いがやや減退した。

「オルフエン、いくぞー！」

「あいよ！」

直後、ガズンさんとオルフエンさんが前に出た。

中衛だと思っていたオルフエンさんが一番前に飛び出すと、華麗かれいな身のこなしでワイルドディア

の右の前足と後ろ足を、すれ違いざまに短剣で切りつける。

『ギャルフフウッ!?』

傷を負ったことで右側にバランスを崩したワイルドディアは、そのまま地面あじに跡を残しながら転がっていく。

そこへ大剣を上段に構えたガズンさんが飛び掛かると、一気に振り下ろす。

「うおおおおおおおっ!!」

——ザシュッ！

鋭く振り下ろされた大剣によって、ワイルドディアの首が一振りで切り落とされた。

「……おお……おおっ！ すごいですね、皆さん!!」

冒険者の戦い方を初めて目の当たりにした俺は、思わず歓喜の声と共に拍手を送った。

「どーよ、俺たちの連係は！」

「ワイルドディア、仕留しとめたりー！ つてね！」

「あまり調子に乗るなよ。すぐに解体をするぞ」

ドヤ顔のオルフエンさんとミシャさんを諫めながら、ガズンさんは手際よくワイルドディアの解体を始めていく。

「はいーい！」

すぐに二人も手を貸し、中型魔獣のワイルドディアがものの数分で毛皮、お肉、牙きはや爪つめ、他にも

様々な素材に切り分けられた。

「よし、こんなものか」

「リディアルも近いし、全部持って帰ろうか！」

「そうだな。血の臭いを嗅ぎつけて他の魔獣が来るかもしれないし、さっさと戻ろうぜ！」

ガズンさんが満足気に頷きながら大きい素材を背負うと、オルフェンさんが生肉などの素材を袋に入れて持ち、ミシャさんが残りの細かい素材を持った。

その様子を見て、俺は尋ねる。

『魔法袍^{まほうかほん}』は持っていないんですか？』

魔法袍とは、見た目以上にものが入り、しかも中は時間が流れない便利な魔導具である。

しかし、俺の問いにガズンさんは苦笑した。

「魔法袍はとても貴重な魔導具だからな。俺達は持っていない。リディアルに来るまではルッツ様が持っているものを借りることもあったが、普段はこんな感じで直接運んでいるんだ」

「……そうなんですね」

ガズンさんの話を聞いて、俺はアニータさんの作った魔法袍を思い浮かべてしまう。

彼女の魔法袍は中の時間経過は止まらないが、それでも大量の荷物を収納することはできる。

それだけでも冒険者にとっては役に立つ魔導具であることに変わりはない。

アニータさんからは魔導具の素材をお願いされていたし、その対価として魔法袍をお願いするの

はありなのではないだろうか。

ガズンさんたちとは出会ってまだ一日も経っていないけど、話をしている悪い印象は全くないし、ルッツさんが護衛に選んだ人たちでもある。信用できる可能性は高そうだ。

そんなことを考えながら、俺たちはリディアルに戻ろうとした——その時だった。

『——アアアアアアアアアアアアアッ!!』

突如、魔の森の奥から耳をつんざくような、甲高い鳴き声が響いてきた。

「ハーピーだ！」

「面倒な魔獣が出てきたなあ」

「お任せあれ！ 空を飛ぶ魔獣でも、私の魔法があれば簡単に……倒せちゃう……え？」

ガズンさんの言葉にオルフェンさんが面倒くさそうに答え、続けてミシャさんが自信満々に話し始めたのだが、段々と声が尻すばみになっていく。

どうしたのだろうと彼女の視線の先を見ると、その理由がなんとなく分かってしまった。

「……ハーピーの、群れ？」

「な、なななな、何匹いるのよおおお!?」

パッと見て五匹か……いや、六匹はいるな。

どうやらこの数を相手にするには、ミシャさんでも骨が折れるということだろう。

「下りてきた奴は俺とオルフェンで相手をする！ ミシャは魔法で上空に待機している奴を狙って

くれ！」

「くそつ、肉の大半は捨てなきゃいけないか」

「もー！ せっかく解体までしたのにー！」

戦うには身軽にしなければならない。毛皮や牙や爪なら問題ないが、オルフェンさんが持つている生肉は、戦闘中にどうしても砂埃すなほこりを被ることになるだろう。

地面に転がってしまったら、それこそ捨てなければならなくなるはずだ。

ミシャさんも言っていたが、せっかく解体までしたのだから、無駄にさせたくはない。

「……ここは、俺たちが戦います！」

「ガルアッ！」

「シャアアッ！」

というわけで、俺はレオとルナにこの場を任せることにした。

「危険だ！ ハーピイは一匹だけならBランクだが、群れとなれば強さがAランクに上がる魔獣なのだぞ！」

「ルッツさんからは聞いているが、それでも小型魔獣は下がっていてくれよな！」

「そうだよ！ これでも私たち、Aランク冒険者なんだからね！」

……なるほど。頭の中では理解していても、実際に小型魔獣が下に見られてしまうのは、正直イラッとしてしまうな。



「……やるぞ。レオ、ルナ！」

「ガルアアアッ!!」

俺が号令ごうれいを掛けると、最初にレオが氷魔法を発動させる。するとレオの前方から広範囲に冷気が広がっていく。

「な、なんだと!？」

「マジかよ!？」

「氷の、階段!？」

ガズンさん、オルフェンさん、ミシャさんが順番に驚きの声を上げた。

「シャアアアッ!!」

続いてレオが作った氷の階段を、ルナが一気に駆け上がっていく。

突然出来上がった氷の階段に驚いていたハーピーたちは、行動が一泊いっぽく遅れていた。

ルナの鋭い爪がハーピーを切り裂き、二匹が地面へ落下していく。

「落ちた奴は俺がやるう！」

そう申し出てくれたのは、ガズンさんだ。

ガズンさんが持っていた素材は、地面に投げ出しても使えなくなるようなものではなく、大剣を抜いて即座に地面でのたうち回るハーピーに止めを刺してくれた。

「レオも行ってくれ！」

俺の合図を受けたレオも階段を上っていき、ルナと一緒に頑張ってハーピーを地面へ落としていく。

しかし、ハーピーもただやられているわけではない。

氷の階段から離れた位置へ移動する。

しかし、そこが射程範囲外しやうていはんがいと思ったら大間違いだ。

レオとルナは氷と炎を空中に作り出し、それを高速で撃ち出していく。

「嘘でしょ!? 私より速いんだけど!!」

撃ち出された氷と炎は、一秒と掛からずハーピーに命中した。

苦悶の声を漏らしながら落ちていく個体もいれば、絶命して地面に叩きつけられる個体もいる。数の優位を完全に失った残りのハーピーたちは、そそくさと魔の森の奥へ逃げ帰ってしまった。

「ガウガウ！」

「ミィミィ！」

脅威きょういが去ったと分かったレオとルナは、俺の足元へやってくると、その顔をこすりつけてきた。

「よしよし。よくやったな」

レオとルナの戦果に大満足の俺は、二匹を両手で抱き上げると、そのままガズンさんたちへ視線を向けた。

「どうですか、俺の従魔たちは？ 小型だからって甘く見たら、痛い目に遭あいますよ？」

小型だからと下に見られたことが嫌だったので、俺はあえてレオとルナを強調するように抱きな

がらそう口にした。

「……リドル殿。先ほどの発言は撤回する。本当にすまなかった」

ガズンさんが申し訳なさそうにそう口にすると、丁寧な頭を下げてくれた。

「ぐ、ごめんなさい!!」

続けてオルフェンさんとミシャさんも勢いよく頭を下げてくれたので、俺は満足したと同時に、やり過ぎたかなと思ってしまった。

「ありがとうございます。それと、すみませんでした。俺もちょっとやり過ぎました」

謝罪を受け入れるのと同時に、俺も頭を下げたのだが、ガズンさんは首を横に振る。

「リドル殿は何も悪くない。俺たちが凝り固まった思考で、小型だからと下に見てしまったのだ」

「ルッツさんに聞いていたのになあ。いや、マジで強かった！ レオもルナもよ！」

「可愛くて強いとか、反則じゃない？」

……そうでしょうとも。レオとルナは可愛くて強い、全てにおいて最強の従魔なんですよ！

「それにリドル殿は、俺たちのためを思っただけに出てくれたのだらう？ 本当に感謝するよ」

「肉が無駄にならずに済んだぜ！」

「今日はみんなでお肉パーティーだね！」

人によっては、どれだけ小型従魔が活躍しても、運がよかったとか、魔獣が弱っていたからだとか、文句を言う人もいる。

むしろ、そちらの方が多くかもしれない。

しかしガズンさんたちは、目の前で起きたことをしっかりと受け止め、自分たちが間違っていたこと、そして感謝を口にすることができる人格者だった。

……本当に、ルッツさんは見る目があるな。

そんなことを思っていると、ガズンさんたちが呟く。

「とはいえ、これ以上は荷物を持ってないし、ハーピイに関しては燃やして処理するしかないか」

「羽はいい素材になるが、しゃーなしだ」

「それじゃあ燃やすねー、ファイア！」

ガズンさんたちは既にワイルドディアの素材を手に行っている。

だから即座に燃やして処理するという答えに行きついたんだろうけど……使える部位が少ないということは、ゼロではないということだ。

……ルッツさんが見定めた人たちだからこそ、やっぱり魔法袍のことをアニータさんにしっかりと相談するべきだと、燃えていくハーピイの死体を眺めながら考えてしまう。

「……それじゃあ、今度こそ戻りましょうか！」

俺が最後にそう発し、みんなでリディアルへと戻っていった。

リディアルに戻った俺たちは荷物も多くあったこともあり、そのままナイルさんの屋敷へ向かう。

「おかえり、リドル！ 皆さんもおかえりなさい！」

ここでもティナが出迎えてくれ、俺は笑顔で手を振り返す。

「ただいま、ティナ。ガズンさんたちのおかげで魔獣狩りが捗^{はか}ったんだけど、ナイルさんは？」

「ちょっと待っててね！」

駆け足で屋敷の中に向かったティナは、すぐにナイルさんを連れてきてくれたのだが、その後ろにはルッツさん、アグリコさん、さらにはアニータさんまでいた。

「おかえり、リドル君。魔獣狩り、捗^{はか}ったんだって？」

「はい。荷物は全部ガズンさんたちが持つてくれています」

俺がそう答えると、ガズンさんたちは荷物を持ち上げて戦果を見せてくれた。

「なんと！ ワイルドディアではないですか！」

「明星の皆さん、そちらはどうなされるのですか！」

ここでルッツさんとアグリコさんが声を上げたので、ガズンさんたちは二人とやり取りを始める。すると今度はアニータさんがそそくさと、俺のところに寄ってきた。

「それで？ 私がお願いした、魔獣の素材は？」

「それについてなんですけど、一つ相談があるんです」

「相談？ え、素材は？」

「ありませんよ。だって、魔獣を狩ったのは明星の皆さんですし、俺だけじゃ魔獣の素材を確保で

きませんからね」

いや、普通に考えたら分かるでしょうよ。そんな愕然^{がくぜん}とした表情されても困りますって。

「それで相談なんですが、アニータさんは魔法袍を作れますよね？ それを俺と、明星の皆さんに作っていただけませんか？」

「「ま、魔法袍を作れる!?」」

俺の発言が耳に入っただろう、ガズンさんたちからも驚きの声が上がった。

「ああ。そのことなのですが、そうなるだろうと思って、事前に私の方でアニータ様とは話を付けておきました」

続いて口を開いたルッツさんは、そう告げたあとに再びガズンさんたちに視線を向ける。

「ここまでの道中で遭遇^{そうぐう}した魔獣の素材。これで私も儲けさせていただきましたので、アニータ様を作る魔法袍の費用は私が負担したいと思います」

どうやら俺が提案をする前に、ルッツさんが話をつけてくれていたようだ。

なんと言うか、先見^{せんけん}の明^めがすごいよな、ルッツさんは。

再会してもう何度、ルッツさんのことをすごいと思ったことか。

しかし、ガズンさん、オルフェンさん、ミシャさんと、大慌てで声を上げる。

「いや、ルッツ様！ それはさすがにもらい過ぎです！」

「そうだぜ！ 魔法袍がどれだけ高価なのか、俺でも知ってるって！」

「ワールドディアの素材を渡しても、まだまだ足りないはずだよね！」

しかしルッツさんは首を横に振る。

「いいえ。ワールドディアの素材は必要ありません。本当に稼がせていただいていますし、Aランクパーティーなら魔獣を狩ることも多いでしょう。それなら、魔法袍は必須ではありませんか？」

「それはまあ、そうなのですが……」

遠慮しているガズンさんに対して、ルッツさんは商人らしい笑みを浮かべながら言葉を続ける。
「言っておきますが、これは施しではありませんよ？　ここで明星の皆さんに恩を売っておけば、もつと稼げる気がするのですよね」

その言葉を聞いて、俺はピンときた。

「もしかしてルッツさん、スキルがそう言っているんですか？」

「いいえ、違いますよ」

違うんかい！？

「単純に、私の商人としての勘です」

……まあ、俺としてはガズンさんたちに魔法袍を持ってもらいたいと思っっているから、そっちの方がありがたいし、これ以上は何も言うまい。

すると、改めてガズンさんが尋ねる。

「……本当によろしいのですか、ルッツ様？」

「もちろんです。そうすれば、私ももつと稼がせてもらえそうですしね」

その言葉を聞き、ガズンさんはオルフェンさん、ミシャさんに目配せをしたあと、笑みを浮かべながら右手を差し出した。

「ありがとうございます、ルッツ様」

「ふふ。交渉成立ですね」

ガズンさんの手をルッツさんが握る。どうやら丸く収まったようだ。

「ちよつと、ちよつと！　それじゃアードル君に魔法袍を渡していたら、私も魔獣の素材を確保できたってことよね！　すぐに持ってくるから、ちよつと待っていてちょうだい！」

するとここでアニータさんが早口でそう言ってきた。

「え？　作るじゃなくて、持ってくるんですか？」

「前にリドル君が言ってくれたじゃない。この村に返せるものがあるって。それが魔法袍や簡易小屋なんだって。だから、作りやすい魔法袍はちょこちょこ作っていたのよ」

アニータさんは、俺の発言をきちんと覚えていてくれたんだな。

「すぐ持ってくるから！　本当に待っていてよね！」

最後にそう告げたアニータさんは、駆け足でナイルさんの屋敷を飛び出すと、物の数分で二つの魔法袍を手に戻ってきてくれた。

「どっちにする！」

戻ってきて早々、アニータさんは魔法袍二つをグイッと目の前に突き出してきた。

一つ目はウエストポーチタイプの魔法袍で、見た目はとても小さく、動くことの多い冒険者には打ってつけのサイズ。

二つ目はショルダーバッグタイプの大きめの魔法袍だ。

「ガズンさんたちから選んでいいですよ」

とはいえ、決めるのは彼らだ。

俺はどちらでも問題ないため、先に選んでもらうことにした。

「俺は腰に提げるタイプがいいと思うが、どうだ？」

「小回りも利くし、いいんじゃないか？」

「私も賛成！」

ガズンさんたちに迷いはないようで、すぐに決まった。

「それじゃ俺が、肩から下げるタイプにします」

「リドル君には言つてあるけど、私の魔法袍は研究中で時間経過はしちゃうから気をつけてね」

「だとしてもありがたい。本当に感謝するよ、アニータさん」

アニータさんが注意事項を伝えると、ガズンさんは頷きながら感謝を口にした。

「というわけで！……リドル君。次からは絶対に、魔獣の素材、よろしくね？」

このタイミングですいっと顔を寄せられ、俺は体を若干引きながら返事をする。

「あはは。分かりましたから、離れてくれませんか？」

「……本当に分かったんでしょね？」

「本当ですよ。魔法袍までいただいたんです、嘘はつきませんよ」

「……………まあ、そういうことなら信じましょう！」

ここでもうやく体を離してくれ、俺はホッと息を吐く。

「今回はハーピーの素材を破棄しましたが、次からは破棄する素材を少なくできそうですね」

俺がそう呟くと、ルッツさんは悲しそうに叫ぶ。

「な、ななな、なんですって!? ハーピーの素材と言えば、その羽は高級繊維せんいに変わるとい
に！……ああ、もつと早くアニータ様とお会いできていれば、こんなことには!!」

なんと、ハーピーの羽がそのような素材になるとは思わず、俺は尋ねる。

「そんなにいい素材なんですか、ガズンさん？」

「まあな。だが、俺たちからすればワイルドディアの素材の方が貴重だったんだ、致し方ない」

「高級繊維せんいって言われても、俺たちにはそれを使った道具なんて回ってこないからな」

「依頼があつたら狩るくらいよ、ハーピーなんて」

冒険者と商人の考え方の違い、なんだろうな。この温度感の差は。

「リドル様！アニータ様と同じことを言うようですが、今後は可能な限り魔獣素材を持ってきてください！私が間違いないく儲けに変えてみせますから！」